

宗教観と子育て・家庭教育

表 真 美

I. 研究の目的

1. 近年の家庭教育

家庭教育はすべての教育の出発点であり、子どもの成長にとって大きな役割を担っている。しかし近年、個人の価値観の多様化にともない、家庭教育力の低下が論じられるようになってきている。国立教育政策研究所が行った家庭でのしつけの実態や家族・子育てに関する意識についての調査（国立教育政策研究所2001）によると、半数以上が最近の家庭教育力が低下していると思っている。家庭教育力が低下した理由としては、「子どもに対して、過保護、甘やかせずぎや過干渉な親の増加」の回答がもっとも多く、66.7%であった。また、自身の子育ての評価として、「よくわからないことがたくさんあった」と約半数が答えている。この回答は若い世代ほど高く、25から34歳では63.4%にのぼる。若い親たちはどのように子どもを叱ればよいか、子どもをどう教育してよいかという手だてを見いだせていないと考えられる。

2. 宗教観と家庭教育

宗教教育は大きく「宗派教育」「宗教知識教育」「宗教的情操教育」に分けることができる（平良2006）。教育基本法第9条では、「宗教に関する寛容の態度」「宗教の社会生活における地位」は尊重すべきとするものの、公教育における「特定の宗教のための宗教教育」を禁止している。「宗教的情操教育」については、政治の場でもその重要性が度々語られ、学習指導要領においては、「生命に対する畏敬の念」といった表現で表されている。しかし、「宗教的情操」とは、宗教的信仰に伴う感情の体系であり、「信仰が存在しない以上、特定の宗教を離れた

一般的、普遍的な宗教的感情もあり得ない。」(小山2012)といった見解も多い。諸外国の宗教教科書を対象とした研究によると、公教育においてキリスト教、イスラム教、仏教などの宗派教育を行っている国は他の宗教を尊重しており、宗派教育を禁止する国では、各々の宗教を徹底的に公平に扱っている。それに対し、高等学校「倫理」などの我国の教科書は、公平性がみられず、特定の宗教を偏重する傾向にあるという(藤原2011ab)。歴史的に形成されてきた我が国の複雑な宗教文化がこのような結果を招くのかかもしれない。

2008年の統計数理研究所の国民性調査によると、「宗教について、何か信仰とか信心をもっているか」という質問に対し、「信じている」との回答は27%であり、1958年の35%から、5年ごとの調査結果は漸減している。「宗教的な心」に関しては、「大切」が69%、「大切でない」が19%であり、1958年から一貫して7割前後が「大切」と回答している(統計数理研究所2009)。とはいえ、近年、マスメディアのとりあげるカルト集団に対するイメージの影響が大きく、宗教にネガティブな先入観を抱く人々が多い。カルト集団に対する「宗教安全教育」の要請も高まっている(保呂2007、井上2011など)。

一方、私立幼稚園・保育所が多くを占める保育現場では、保育目標の抛り所に宗教を位置づける例も少なくなく、その成果も報告されている(出野2004)。しかし、家庭教育においては、我国の伝統文化に根付いた宗教的な視点が薄れつつあるのが現状である。梶田は、いのちの教育に関する著書の中で、宗教的な考え方が子どもの人間教育のために有効であることを述べている(梶田2013)。人間教育の端緒である家庭教育の抛り所として、宗教的視点が求められているのではないだろうか。

そこで本研究は、幼児を育てる保護者を対象とした質問紙調査から、宗教観と子育て・家庭教育との関連を明らかにし、家庭教育の抛り所としての宗教的情操教育の可能性検討の資料を得ることを目的とする。

Ⅱ. 研究方法

1. 使用データ

3・4・5・6歳児をもつ保護者に対する質問紙調査のデータを用いた。

2009年1月中旬に京都市の全認可保育所から乳児保育所を除く246箇所、全私立幼稚園99箇所、計345箇所に質問紙調査の依頼文書を郵送したところ、保育所44箇所、幼稚園27箇所より協力の回答を得たので、2月初旬に各保育所、幼稚園の3・4・5歳児の数に応じて調査票を郵送した。保育所、幼稚園において3・4・5歳児保護者に調査票が配布され、留め置き法により調査が実施された。2月下旬より3月に保育所40箇所、幼稚園24箇所より回収された調査票の返送があった。有効回収数は保育所1,617票、幼稚園2,909票、有効回収率は各々59%、82%である。計4,526票を分析対象とした。

主な調査項目は、子どもの生活習慣、家庭教育に関連する親子の共同行動の頻度、塾・習い事、園を選ぶとき考慮したこと、子どもの性格認知、子どもの将来の希望、家庭教育、子育て支援の利用、子育て感、子育て観、子育てネットワーク、子育て満足度である。

調査対象となった幼児は3歳児4.6%・4歳児27.8%・5歳児31.7%・6歳児27.7%、男児50.2%・女児47.1%、記入者は母親95.9%・父親2.6%、73%が30歳代であった。親との同居は、同居12.2%、別居85.0%、母親の職業は、フルタイム11.5%、パートタイム26.2%、自営業7.1%、無職54.3%であった。

調査の単純集計（表2013）、ひとり親家族（表2011）、および子育て支援（表2013）について分析した結果については既に報告を行っている。

2. 変数の設定と分析方法

(1) 独立変数

調査では、子どもが通う園を選ぶときに重視した事項を複数回答で尋ねている。「雰囲気が良い」が最も多く54.2%、次いで「家から近い」49.7%、「見学のときの印象が良い」40.1%、「評判が良い」32.6%、「給食がある」33.5%、「通園

バスがある」30.6%であった。そのなかで、「仏教精神について教えている」「キリスト教精神を教えている」と回答した保護者は、各々302名、49名であった。仏教系の園、キリスト教系の園に通わず保護者のなかで、宗教を教えることで園を選んだ保護者（仏教16.5%・キリスト教10.2%）とそうでない保護者で子育て・家庭教育に関する違いがあるのかを比較した。

また、64の協力園を「仏教系」22園1832名・40.5%、「キリスト教系」8園481名・10.6%、「無宗教」34園2213名・48.9%に分け、子育て・家庭教育について、比較をおこなった。

(2) 従属変数

従属変数は、家庭教育、子育て感、子育て意識、子育てネットワーク、子育て満足度である。以下に、各々の変数について述べる。

1) 家庭教育

家庭教育は、日常的な家庭での共同行動を含む教育に関する事項15項目を設定し、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢を設けた。全体の結果では、「一緒に話す」「一日の出来事を聞く」頻度が高い一方、家族で出かける図書館や美術館に出かける頻度は低くなった。

15項目の家庭教育をカテゴリー分けするために因子分析した結果、5つの因子が抽出された。「挨拶や礼儀作法」「言葉の乱れや流行語」を注意する、の2変数からなる「しつけ志向」因子、「決まった手伝いを毎日させる」「遊びや学習をルールを決めて行う」からなる「ルール志向」因子、「ひらがな・かたかな」「数字・算数」「英語」の学習の3変数からなる「知育志向」因子、「一緒に遊ぶ」「一緒に話をする」「一日の出来事を聞く」「叱るよりほめる」からなる「ふれあい志向」因子、「絵本の読み聞かせ」、「図書館」「動物園・植物園・水族館」「美術館・博物館」に連れて行くの4変数からなる「情操教育志向」因子である。これらの因子は十分な α 係数が得られなかったため、個別に分析した。

2) 習い事

習い事は、「何もしていない」「水泳」「楽器の個人レッスン」「お絵かきや造

形教室」「英語」「通信教育」など15の具体的な選択肢を儲け複数回答とした。「何もしていない」との回答が41.8%、習い事は水泳が21.3%でもっとも多く、次いで水泳以外のスポーツ教室（13.3%）、通信教育（12.4%）であった。習い事の総数は最低値0、最高値7、平均は0.98だった。

3) 子育て感

子育て感については10項目をあげ、「日ごろの子育てに関し次のように思うことがありますか」との問いに対し、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢を設けた。全体の結果では、「子どもと一緒にいると楽しい」「子育てによって自分が成長している」というプラスの考えに肯定する母親は9割前後でとても多いが、「毎日同じことの繰り返し」「仕事や趣味を制約される」「どうしたらよいかわからない」と思う母親も5割前後いた。

子育て感の10変数をカテゴリー分けするために因子分析を行った結果、3因子が抽出された。「子育てによって自分が成長している」「子どもと一緒にいると楽しい」からなる「前向き育児」因子、「自分ひとりで子どもを育てている」「子育てのために我慢ばかりしている」「毎日同じことの繰り返しである」「子どもがわずらわしい」「子どものために仕事や趣味を制約される」からなる「不満育児」因子、「自分は子どもうまく育てている（反転）」「子どものことでどうしたらよいかわからない」「子育てに失敗しているのではないか」からなる「不安育児」因子である。これらの因子は十分な α 係数が得られなかったので個別で分析した。

4) 子育て意識

子育て意識は、「あなたは子育てに関しどのような考えをおもちですか。」との質問に関して、4項目について、「非常にあてはまる」「かなりあてはまる」「少し当てはまる」「まったくあてはまらない」の4つの選択肢を設けた。全体の結果では、「子育ては母親だけでなく父親との共同によるもの」「子育ては親だけでなく社会全体で行うもの」「子育ても大事だが自分の生き方も大切にしたい」の順に肯定する割合が高くなった。とくに「父親との共同」という考え方に「非

常に当てはまる」者は半数以上にのぼった。

5) 子育てネットワーク

子育てネットワークは5項目について、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「ぜんぜんない」の4つの選択肢を設け、「夫婦で話し合う」「夫が家事育児をする」に関しては、夫がいない家族を考慮して「該当しない」の選択肢を加えた。全体の結果では、「夫が育児や家事をする」「子どもを預かってもらう」頻度が低かった。この他「同じ年くらいの子どもの保護者とはなす」「親や知り合いに子どもを預かってもらう」頻度を尋ねている。子育ての不満や不安を減少させるには、夫婦で話し合うことや、母親の就業が影響を及ぼしていた(表2013)。

6) 子育て満足度

「あなたは現在、お子さんの生活習慣やしつけの状況に全体として満足していますか。」との質問に、「とても満足している」「まあ満足している」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の4選択肢を設けた。全体の各々の回答率は、4.6%、67.6%、25.1%、1.5%であった。

Ⅲ. 研究結果と考察

1. 宗教を重視する保護者の状況

宗教を重視するのはどのような保護者なのか、前述の「無関心」グループと「宗教重視」グループにわけて、幼稚園・保育園、年齢、職業、親との同別居とのカイ二乗検定によるクロス検定集計を行った結果、仏教系では年齢と職業に、キリスト教系でも年齢に有意差が認められた。宗教を重視するグループは40歳代が多く、また、仏教を重視するグループは自営業が多くなった(表1・2・3)。

年齢層の高い保護者は、幼稚園や保育所を選ぶ際に、年齢層の低い保護者よりも保育内容を考慮するためと考えられる。

表 1. 仏教重視 と 年齢

		年齢			合計
		20歳代	30歳代	40歳以上	
仏教	重視 人数	8	208	84	300
	%	2.7%	69.3%	28.0%	100.0%
	その他 人数	87	1129	307	1523
	%	5.7%	74.1%	20.2%	100.0%
合計	人数	95	1337	391	1823
	%	5.2%	73.3%	21.4%	100.0%

P = 0.002

表 2. 仏教重視と職業

		職業				合計
		常用雇用	パート	自営業	無職	
仏教	重視 人数	21	62	39	174	296
	%	7.1%	20.9%	13.2%	58.8%	100.0%
	その他 人数	150	369	130	870	1519
	%	9.9%	24.3%	8.6%	57.3%	100.0%
合計	人数	171	431	169	1044	1815
	%	9.4%	23.7%	9.3%	57.5%	100.0%

P = 0.03

表 3. キリスト教重視と年齢

		年齢			合計
		20歳代	30歳代	40歳代	
キリスト教	重視 人数	1	29	18	48
	%	2.1%	60.4%	37.5%	100.0%
	その他 人数	21	334	69	424
	%	5.0%	78.8%	16.3%	100.0%
合計	人数	22	363	87	472
	%	4.7%	76.9%	18.4%	100.0%

P = 0.001

2. 仏教系園に通わず保護者における仏教重視グループとその他のグループの比較

1) 家庭教育

日頃の家庭教育の頻度について、T検定により仏教重視グループとその他のグループの比較を行った。図1に仏教系園の結果を示している。「ふれあい」因子の3項目以外の12項目に有意差が認められ、すべて仏教重視グループの頻度が高くなっていることがわかる。ルールを決めること、知育、絵本の読み聞かせや子どもを文化施設に連れていくことは両者で大きな平均値の差がみられる。子どもを預ける園を決める際に、仏教を子どもの教育に取り入れることに前向きな保護者は、家庭教育に積極的であることが明らかとなった。

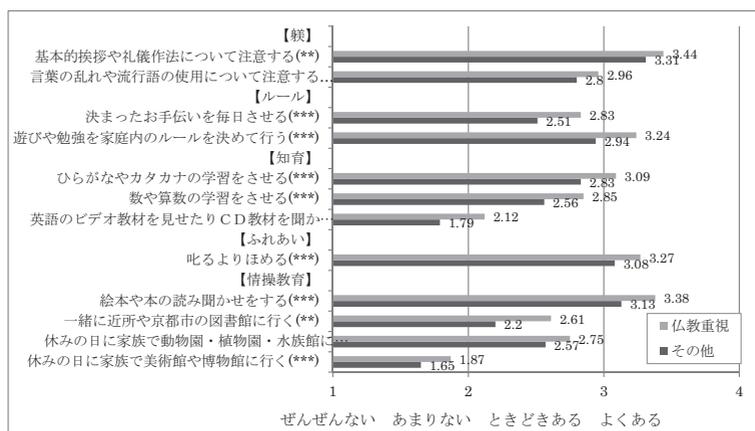


図1 仏教重視と家庭教育

2) 習い事の総数

習い事の総数について、T検定により仏教重視グループとその他のグループの比較を行った結果、平均値は各々1.6、1.05 (p=0) であり有意差がみられた。全体平均が0.98であるので、仏教重視グループははかかなり全体平均を上回っていることがわかる。

3) 子育て感

子育て感について、T検定により仏教重視グループとその他のグループの比較を行った結果を図2に示している。「子育てによって自分が成長している」は仏教重視グループの平均値が有意に高く、「毎日同じことの繰り返し」と思う頻度は、仏教重視グループが低くなった。仏教を重視する保護者は、前向きな気持ちで子育てに取り組んでいることが明らかになった。

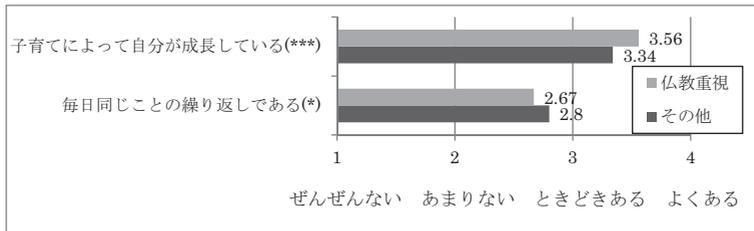


図2 仏教重視と子育て感

4) 子育て意識

子育て意識について、T検定により仏教重視グループとその他のグループの比較を行った結果、「子どもが3歳までは母親が育てた方がよい」との回答が、仏教重視グループの方が有意に高くなった（平均値：仏教2.46・その他2.18、 $p = 0$ ）。仏教重視グループ自営業の母親が多いことがこの結果を導く要因の一つと考えられる。

5) 子育てネットワーク

子育てネットワークについて、T検定により仏教重視グループとその他のグループとの比較を行った。仏教重視グループは、「子どもの様子や心配事を夫婦で話し合う」頻度が有意に高くなった（ $p = 0.008$ ）。前述のように、この項目は子育て感と深く関連している。夫婦で話し合う頻度が高いことは、子育てにより結果をもたらすものと考えられる。

6) 子育て満足度

子育て満足度について、検定により仏教重視グループとその他のグループとの比較を行ったが、有意差はなかった。

3. キリスト教系園に通わず保護者におけるキリスト教重視グループとその他のグループの比較

1) 家庭教育

日頃の家庭教育の頻度について、T検定によりキリスト教重視グループとその他のグループの比較を行った。有意差がみられた項目数は仏教系園よりも少なく、図3にみられる3項目であった。しかし、絵本の読み聞かせ、美術館・博物館に行く頻度は、キリスト教重視グループの頻度とその他の差が極めて大きくなった。情操教育因子に含まれるこれら3項目は、仏教系園でも有意差がみられている。

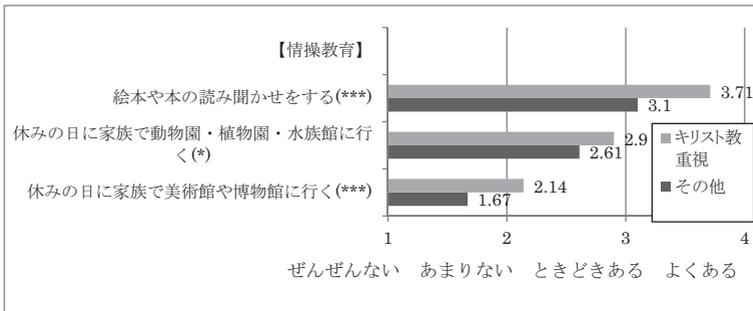


図3 キリスト教重視と家庭教育

2) 習い事の総数

習い事の総数について、T検定によりキリスト教重視グループとその他のグループの比較を行った。平均値は各々1.5、1.1 ($p = 0.17$) であり有意差がみられた。キリスト教重視グループは仏教重視グループとともに、習い事にも熱心であることがわかった。

3) 子育て感

子育て感について、T検定によりキリスト教重視グループとその他のグループの比較を行った結果を図4に示している。「子育てによって自分が成長している」はキリスト教重視グループの平均値が有意に高く、「毎日同じことの繰り返し」「子育てのために我慢ばかりしている」と思う頻度は、キリスト教重視グループが低くなった。キリスト教を重視する保護者は、前向きな気持ちで子育てに取り組み、子育てに対する不満が少ないが明らかになった。

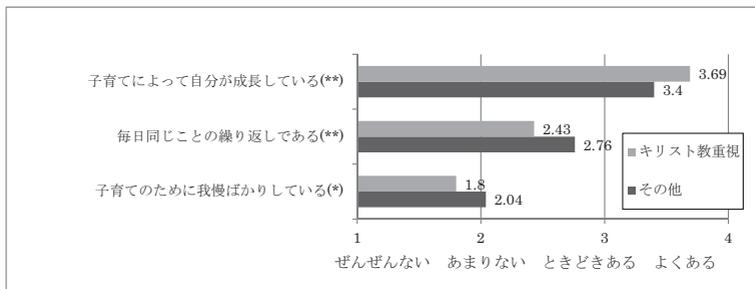


図4 キリスト教重視と子育て感

4) 子育て意識

子育て意識について、T検定によりキリスト教重視グループとその他のグループの比較を行った結果、「子どもが3歳までは母親が育てた方がよい」との回答が、仏教重視グループの方が有意に高くなり（平均値:キリスト教2.57その他2.23、 $p = 0.032$ ）、仏教系園と同様の結果となった。宗教を重視する保護者は、子育てに関してジェンダー意識をもつ傾向があることが明らかとなった。

5) 子育てネットワーク・子育て満足度

子育てネットワーク・子育て満足度について、T検定によりキリスト教重視グループとその他のグループとの比較を行ったが、有意差はなかった。

4. 仏教系、キリスト教系、無宗教園の保護者の比較

次に、64の協力園を「仏教系」「キリスト教系」「無宗教」の3グループに分けて、

子育て・家庭教育について比較した結果を述べる。

表4に有意差が得られた結果のみを示した。

表4 仏教系園、キリスト教系園、無宗教園の比較

家庭教育				
<知育>	平均値			p
ひらがな	仏教>	無宗教	キリスト教	
	2.87	2.77	2.73	0
数・算数	仏教>	無宗教	キリスト教	
	2.61	2.5	2.48	0
英語	キリスト教	仏教>	無宗教	
	1.91	1.85	1.74	0
<情操教育>				
絵本の読み聞かせ	仏教	キリスト教>	無宗教	
	3.17	3.16	3.07	0
図書館へ行く	キリスト教>	仏教>	無宗教	
	2.43	2.24	2.08	0
美術館・博物館へ行く	キリスト教	仏教>	無宗教	
	1.72	1.68	1.58	0
子育てネットワーク				
夫婦で話し合う	仏教	キリスト教>	無宗教	
	3.34	3.32	3.21	0.001
子どもの保護者と話す	仏教	キリスト教>	無宗教	
	3.61	3.55	3.47	0
子育て意識				
3歳までは母親	仏教	キリスト教>	無宗教	
	2.26	2.23	2.12	0
4：よくある 3：ときどきある 2：あまりない 1：ぜんぜんない				
習い事				
習い事総数	仏教	キリスト教>	無宗教	
	1.14	1.14	0.81	0
最低値0～最高値7 平均0.98				

知育に関しては3項目すべてに有意差がみられた。ひらがな、数・算数を教える頻度は、仏教系園が高くなった。英語を教える頻度は、キリスト教系園と仏教系園の頻度が高くなった。

絵本の読み聞かせはキリスト教系園、仏教系園の頻度が高く、図書館へ行く頻度はキリスト教園、仏教園、無宗教園の順で、美術館へ行く頻度はキリスト教系の園、次いで仏教系園の頻度が高くなった。

「夫婦で話し合う」「子どもの保護者と話す」頻度は共に仏教系園、キリスト教園の頻度が高くなった。仏教系園とキリスト教園は無宗教の園の保護者よりも「3歳までは母親が育てた方がよい」と思っていた。

積極的に宗教系の園を選んでいない保護者が大多数であるが、仏教やキリスト教を教えることを重視した保護者が示した前述の傾向と重なる結果となった。とくに情操教育、絵本の読み聞かせや動植物園・水族館、美術館・博物館に行く頻度、3歳までは母親が育てた方がよいという考え方は宗教との関連がみられた。

5. 子育てに関する自由記述から

質問紙の最後に「子育てについて、お悩みやご意見等ありましたら、どんなことでも結構ですので、ご記入ください」とし、およそ縦2cm×横18cmの枠を設けたところ、有効な記述が659票得られた。そのうち、母親633名(96%)、父親14名(2%)、祖母7名(1%)、不明5名であり、母親の15%、父親の12%、祖母の22%が自由記述欄に記入していた。年齢は10・20歳代7%、30歳代72%、40歳代19%であった。職業は、フルタイム17%、パートタイム25%、自営業9%、無職48%であり、フルタイムと自営業の記入が多く無職の記入が少なかった。また、幼稚園児の保護者57%、保育所43%であり、保育所に預ける保護者の記入が多かった。

(1) 宗教に関する自由記述

宗教に関する自由記述は少なく、日常生活において子育て・家庭教育を行う場面で、保護者が「宗教」について意識することが少ないことを物語っている。

以下、その一部を紹介する。

「学校が塾化してゆくには大反対です。ゆとり教育の全てが失敗だとは思いません。日本では、一定の宗教をよりどころにできないため、難しい仕事であるとは思いますが、道徳観を子供に身につけさせる場であって欲しいと思います」(30代・無職・別居・とても満足・無宗教)

(2) 「叱り方」「しつけ」に関する自由記述

宗教に直接は関係しないが、しつけや叱り方に関しての保護者の考えを明らかにするために、自由記述の内容を紹介する。「叱」を含む記述は37件、「しつけ」は18件みられた。

叱ることについては、叱った後後悔する、つい叱ってしまう、叱り方がわからない、叱ってもきかない、きょうだい喧嘩の叱り方に悩んでいる、最近叱れない親が多い、その他夫が叱ってくれない、夫が叱り過ぎるといった内容であった。以下にその例を示す。

「叱りすぎた後、自己嫌悪に陥る。叱るときに『何で!』とすぐ問い詰めてしまい、自分の叱りかたに疑問を感じてしまう。」(40代・無職・別居・あまり満足していない・無宗教)

「叱り方が悪いのか子どもがなぜ怒られているかあまり納得していないようです。」(30代・無職・別居・あまり満足していない・無宗教)

また、しつけに関しては、しつけをし過ぎて親の顔色を見る子にならないか、しつけのしかたについての不安、しつけは大変・難しい、最近の親は子のしつけができていないといった悩みや意見が寄せられた。具体的には、以下のとおりである。

「『しつけ』をちゃんとしないと・・・と思う反面、あまりガミガミと細かいところまで注意すると子どもがのびのびと育たないのでは・・・と不安になる」(30代・無職・別居・まあ満足・無宗教)

国立教育政策研究所による調査から、「若い親たちはどのように子どもを叱ればよいか、子どもをどう教育してよいかという手だてを見いだせていない」状

況が示唆されたことを前に述べた。本調査でも、現代の保護者は子どもを叱ること、しつけをすることにためらいをもつことが自由記述に表れている。しつけ、叱ることの「根拠となるもの」が求められていると言えるだろう。

IV. まとめと今後の課題

2009年1月～3月に、京都市の保育所・幼稚園を通して、3・4・5・6歳児をもつ保護者に対して行った質問紙調査データを用いて、幼児をもつ保護者の宗教観と子育て・家庭教育の関連を探った。その結果得られた知見は以下の3点にまとめることができる。

1) 仏教系園において、園を選ぶ際に仏教を重視した保護者は、躰、家庭内のルールを決める、知育、情操教育など、家庭教育全般に熱心であった。子育てに関しても前向きに観じており、夫婦で話し合う頻度が高かった。

2) キリスト教系園において、園を選ぶ際にキリスト教を重視した保護者は、情操教育の頻度が高かった。また、子育てに関する不満が少なかった。

3) 仏教を重視した保護者、キリスト教を重視した保護者はともに、子どもに複数の習い事をさせており、「子どもが3歳までは母親が育てた方がよい」と考える人が多かった。

4) 園選びの際に宗教を重視していない保護者も含めて、全対象者を仏教系、キリスト教系、無宗教園の3つに分け、家庭教育、子育ての比較を行った結果、宗教系園に子どもを通わす保護者は知育、情操教育に熱心であった。また、夫婦で話し合う頻度が高く、3歳までは母親が育てた方がよいと考えていた。

以上の結果から、宗教を重視する保護者は、夫婦で子育てについて話し合い、子育てに前向きで家庭教育に熱心であることが示唆された。園選びの際に宗教を重視する保護者は、子どもに受けさせたい保育方針について、明確な考えを持っていることが、このような結果を導く要因の一つと考えられる。

また、現代の保護者は子どもを叱ること、しつけをすることにためらいをもつことが自由記述に表れており、日本の家庭における子育て・家庭教育にも宗

教的拠りどころを定着させる必要があるのではないか。ただし、子育て・家庭教育の主体が母のみと考えるジェンダー意識の傾向には、注意を払うことが必要である。

今後は戦前から現代までの家庭における宗教的教育の位置づけの変遷について、検討を行う予定である。また、保育者を対象とした調査により、園の保育方針が家庭教育に及ぼす影響について明らかにし、宗教が教育に及ぼす効果についての研究を深めたい。

文献

- 出野由希子2004「幼稚園の中の情操教育：仏教幼稚園の観察から」早稲田教育評論18（1）、71-83、
- 藤原聖子2011a『教科書の中の宗教－この奇妙な実態』岩波書店
- 藤原聖子2011b『世界の教科書で読む〈宗教〉』筑摩書房
- 保呂篤彦2007「大学生への宗教教育」『筑波フォーラム』76号、66-69
- 井上順考「グローバル化・情報化における宗教教育の新しい認知フレーム」『宗教研究』85（2）、111-137
- 梶田毅一2013「仏教の教えやイエスのメッセージの再認識を」『〈いのち〉の自覚と教育』ERPブックレット
- 小山一乗2012「宗教的情操教育の成立基盤考」『駒澤大学佛教学部研究紀要』70、73-98
- 国立教育政策研究所2001「家庭の教育力再生に関する調査研究」
- 表真美2013『家庭と教育 子育てと家庭教育の現在・過去・未来』ナカニシヤ出版、1-14
- 表真美2013「子育て支援利用の現状と課題 - 保育所・幼稚園における質問紙調査から -」『京都女子大学発達教育学部紀要』9、1-9
- 表真美2011「ひとり親家族の家庭教育と子育て」『京都女子大学発達教育学部紀要』7、1-8
- 平良直2006「日本の公教育における現状と家庭教育」『八洲学園大学紀要』2、57-64
- 統計数理研究所2009「国民性の研究 第12次全国調査－2008年全国調査（調査結果発表用資料）」、64-69

〈キーワード〉

宗教観、家庭教育、仏教、キリスト教